

令和6年度「県民健康調査」健康診査 (16歳以上) 結果報告

<補足事項>

※16～39歳、40～64歳、65歳以上の3つの年齢に区分し、グラフ化した。

※全く同じ母集団ではなく、経年的な変化を比較することができないため、断定的なことは言えない。

【参考／赤血球数の平均年齢の推移】

年齢区分(全体)	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
16～39歳	28.1	28.6	29.0	29.0	29.2	29.2	29.2	29.1	29.4	28.9	28.9	29.2	29.3	29.3
40～64歳	54.0	54.9	55.3	55.1	55.0	55.1	55.1	55.0	55.1	54.8	54.7	54.7	54.5	54.4
65歳以上	73.7	73.5	73.5	73.3	73.3	73.3	73.3	73.4	73.4	73.7	73.8	74.0	74.2	74.4

※集計結果の表章記号の規約は、厚生労働省の人口動態調査と同様に表記した。

計数のない場合

—

比率が微小(0.05未満)の場合

0.0%

※参考資料

平成23～26年度 ; 第21回検討委員会資料3-2「健診項目別受診実績基礎統計表」

平成27年度 ; 第26回検討委員会資料3-2「健診項目別受診実績基礎統計表」

平成28年度 ; 第30回検討委員会資料2-3「健診項目別受診実績基礎統計表」

平成29年度 ; 第34回検討委員会資料2-3「健診項目別受診実績基礎統計表」

平成30年度 ; 第37回検討委員会資料4-4「健診項目別集計結果」

令和元年度 ; 第41回検討委員会資料3-4「健診項目別集計結果」

令和2年度 ; 第44回検討委員会資料4-4「健診項目別集計結果」

令和3年度 ; 第48回検討委員会資料4-4「健診項目別集計結果」

令和4年度 ; 第50回検討委員会資料1-5「健診項目別集計結果」

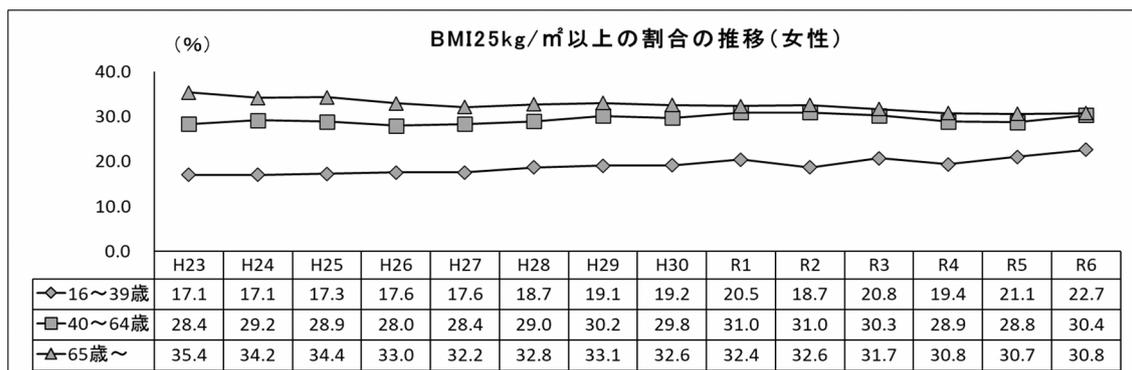
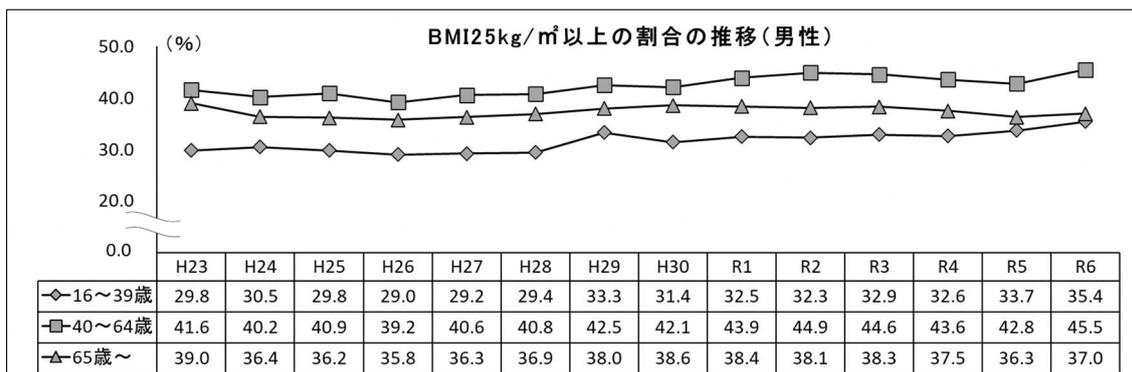
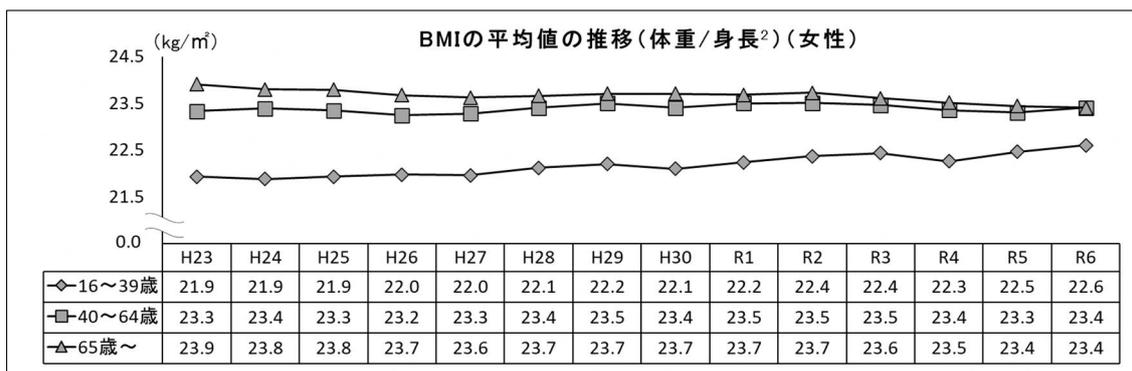
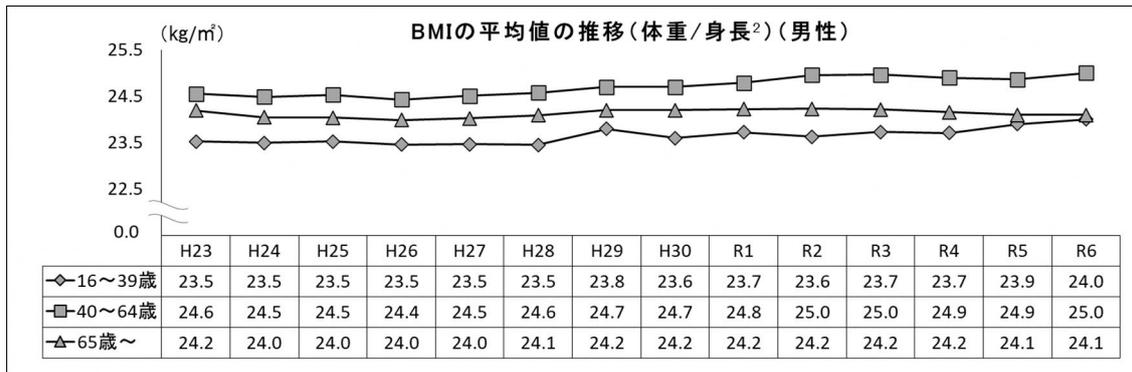
令和5年度 ; 第54回検討委員会資料1-4「健診項目別集計結果」

身体検査 (BMI)

1 結果

BMI $25\text{kg}/\text{m}^2$ 以上の男性の割合は、16～39歳で令和5年度から増加傾向がみられた。40～64歳で令和6年度に増加傾向がみられた。65歳以上では大きな変化はみられなかった。

BMI $25\text{kg}/\text{m}^2$ 以上の女性の割合は、16～39歳で令和5年度から増加傾向がみられた。40～64歳では大きな変化はみられなかった。65歳以上では、平成23年度から令和4年度にかけてやや減少する傾向がみられ、その後は大きな変化はみられなかった。



2 グラフの説明

身長と体重の測定値から BMI を算出し、25.0 以上を肥満と判定した。

$$\text{BMI} = \text{体重 (kg)} \div \text{身長 (m)} \div \text{身長 (m)}$$

3 参考基準値

肥満度分類

BMI (kg/m ²)	判定	WHO 基準
BMI < 18.5	低体重	Underweight
18.5 ≤ BMI < 25	普通体重	Normal range
25 ≤ BMI < 30	肥満 (1 度)	Pre-obese
30 ≤ BMI < 35	肥満 (2 度)	Obese class I
35 ≤ BMI < 40	高度肥満 肥満 (3 度)	Obese class II
40 ≤ BMI	高度肥満 肥満 (4 度)	Obese class III

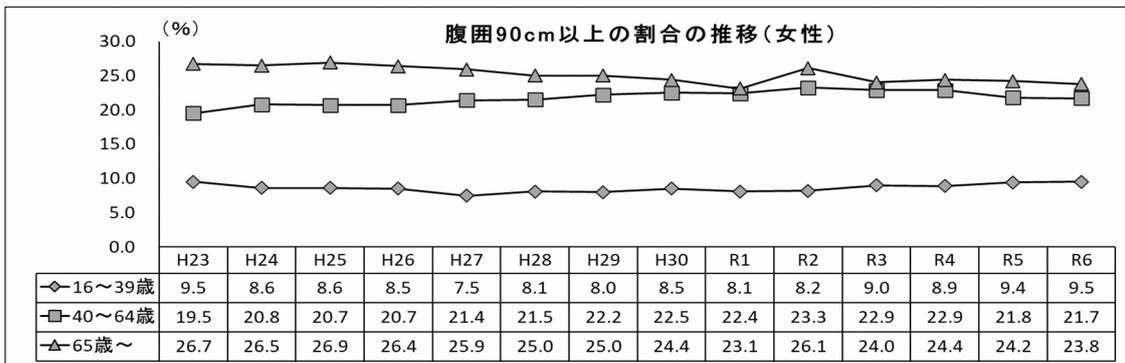
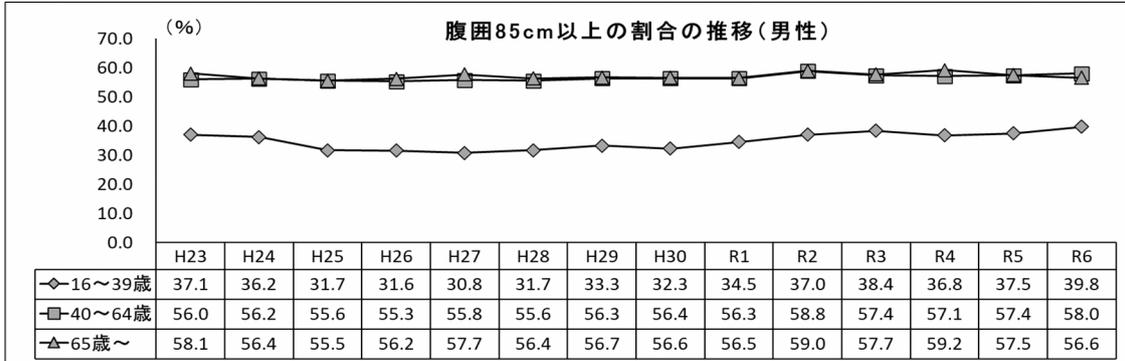
出典：日本肥満学会作成「肥満症診療ガイドライン 2022」

身体検査（腹囲）

1 結果

腹囲 85cm 以上の男性の割合は、16～39 歳で平成 23 年度から平成 27 年度にかけて減少傾向がみられたが、その後、令和 6 年度にかけてはやや増加する傾向がみられた。

腹囲 90cm 以上の女性の割合は、40～64 歳で平成 23 年度から令和 2 年度にかけて増加傾向がみられ、その後はやや減少する傾向がみられた。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、メタボリックシンドロームの診断基準であるウエスト周囲径（腹囲）を評価した。

3 参考基準値

メタボリックシンドロームの診断基準

内臓脂肪（腹腔内脂肪）蓄積	
ウエスト周囲径	男性 ≥ 85 cm 女性 ≥ 90 cm
(内臓脂肪面積 男女とも ≥ 100 cm ² に相当)	
上記に加え以下のうち2項目以上	
高トリグリセライド血症	≥ 150 mg/dL
かつ/または	
低 HDL コレステロール血症	< 40 mg/dL 男女とも
収縮期血圧	≥ 130 mm Hg
かつ/または	
拡張期血圧	≥ 85 mm Hg
空腹時高血糖	≥ 110 mg/dL

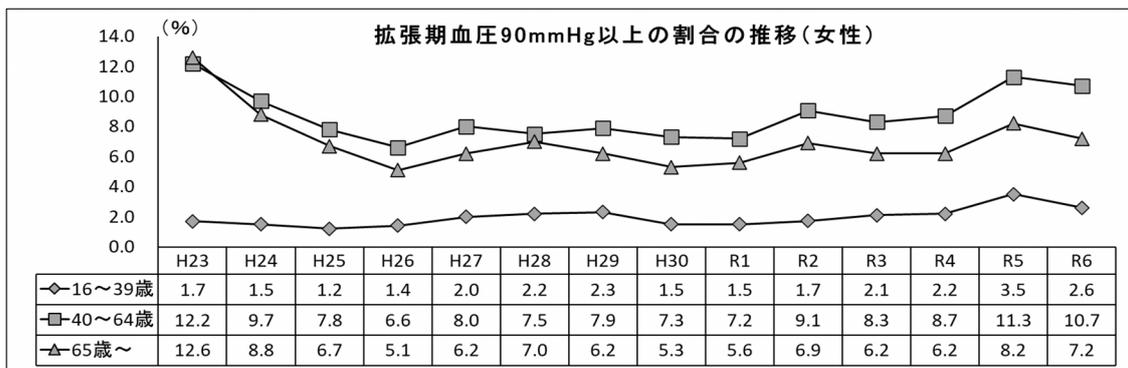
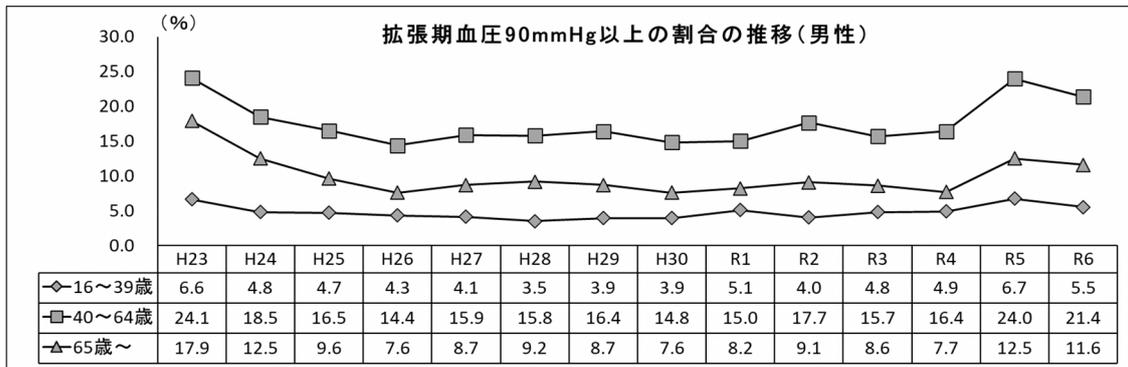
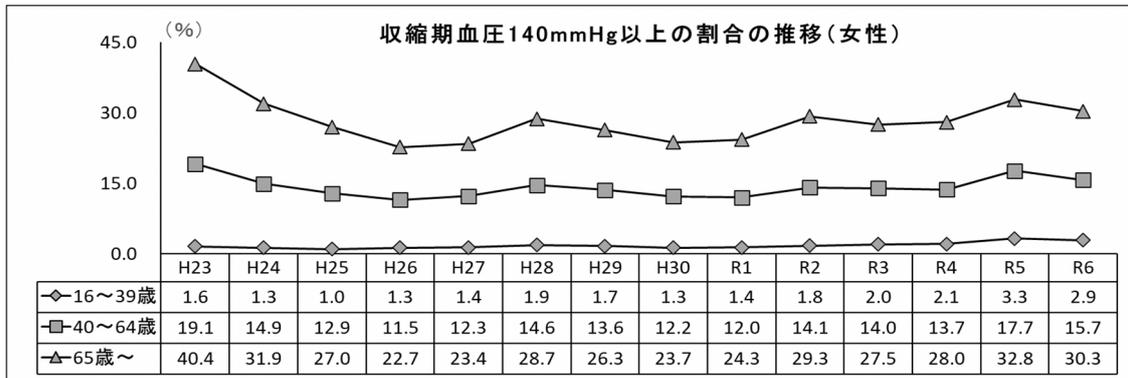
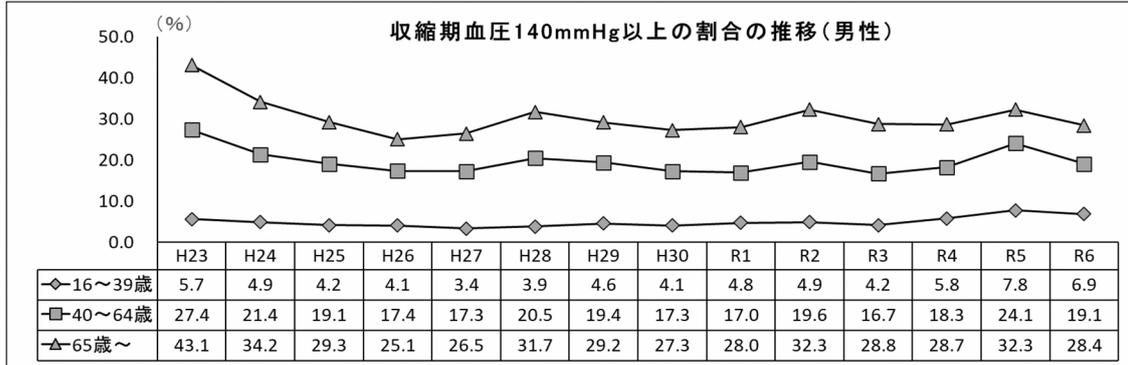
出典：メタボリックシンドローム診断基準検討委員会作成
「メタボリックシンドロームの定義と診断基準（2005年）」

身体検査（血圧）

1 結果

収縮期血圧 140mmHg 以上の割合は、40 歳以上の男女ともに、平成 23 年度から平成 26 年度まで減少傾向がみられ、その後は一定の傾向を示さなかった。

拡張期血圧 90mmHg 以上の割合は、40 歳以上の男女ともに、平成 23 年度から平成 26 年度まで減少傾向がみられ、その後は一定の傾向を示さなかった。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、収縮期および拡張期高血圧を判定した。

3 参考基準値

成人における血圧値の分類

分類	診察室血圧 (mm Hg)		家庭血圧 (mm Hg)	
	収縮期血圧	拡張期血圧	収縮期血圧	拡張期血圧
正常血圧	<120	かつ <80	<115	かつ <75
正常高値血圧	120-129	かつ <80	115-124	かつ <75
高値血圧	130-139	かつ/または 80-89	125-134	かつ/または 75-84
I 度高血圧	140-159	かつ/または 90-99	135-144	かつ/または 85-89
II 度高血圧	160-179	かつ/または 100-109	145-159	かつ/または 90-99
III 度高血圧	≥180	かつ/または ≥110	≥160	かつ/または ≥100
(孤立性)収縮期高血圧	≥140	かつ <90	≥135	かつ <85

出典：日本高血圧学会作成「高血圧管理・治療ガイドライン 2025」

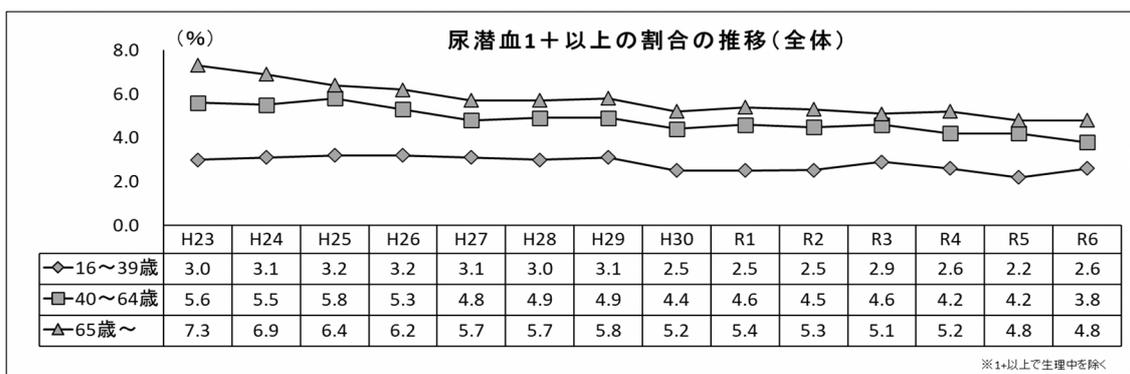
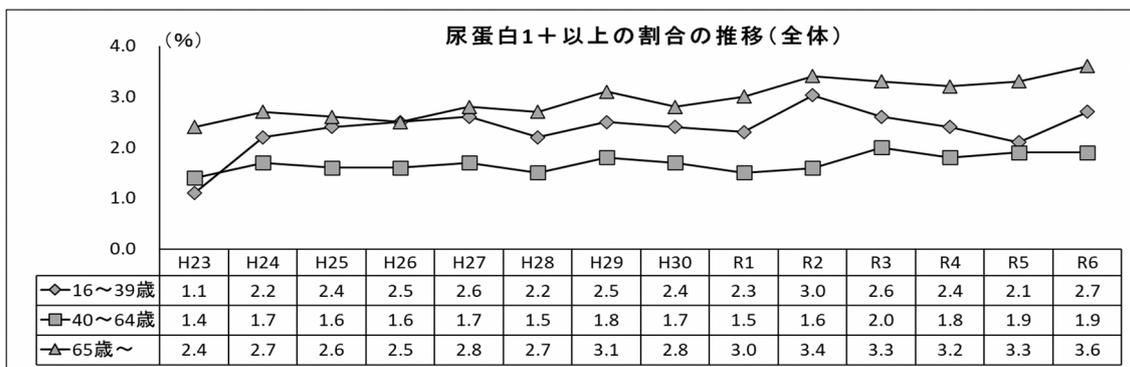
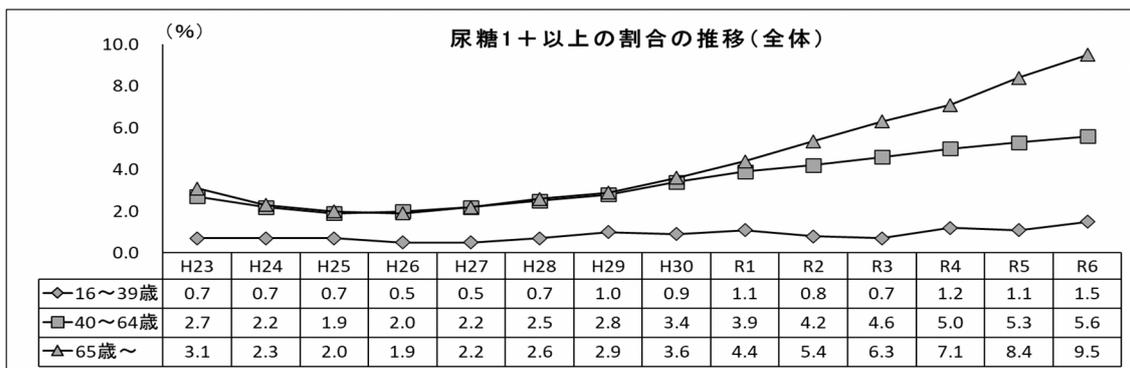
尿検査（尿糖、尿蛋白、尿潜血）

1 結果

尿糖1+以上の割合は、40歳以上において、平成27年度から増加傾向がみられた。

尿蛋白1+以上の割合は、65歳以上において、緩やかに増加する傾向がみられた。

尿潜血1+以上の割合は、65歳以上では、平成23年度から令和5年度まで減少傾向がみられた。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、検尿異常を判定した。

3 参考基準値（集団健診・個別健診で使用している判定基準）

項目	判定区分		
	基準範囲内	軽度異常	異常
尿糖	(-)	(±)	(+) 以上
尿蛋白	(-)	(±)	(+) 以上
尿潜血	(-)	(±)	(+) 以上

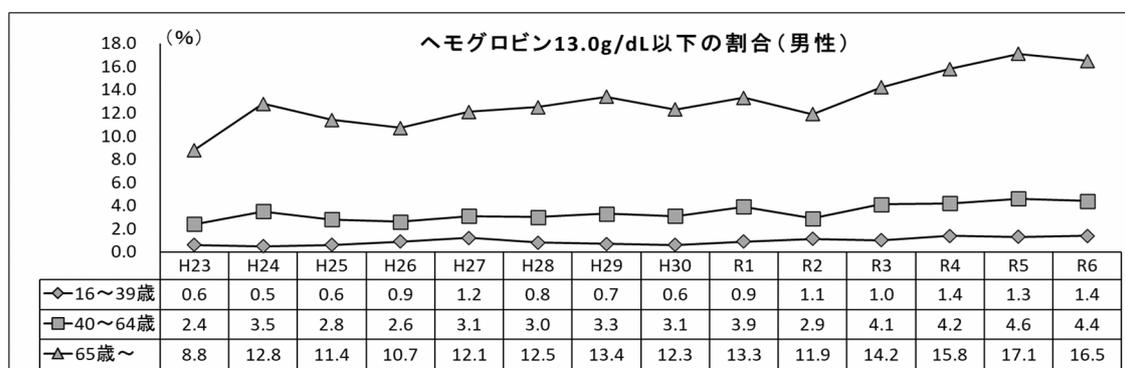
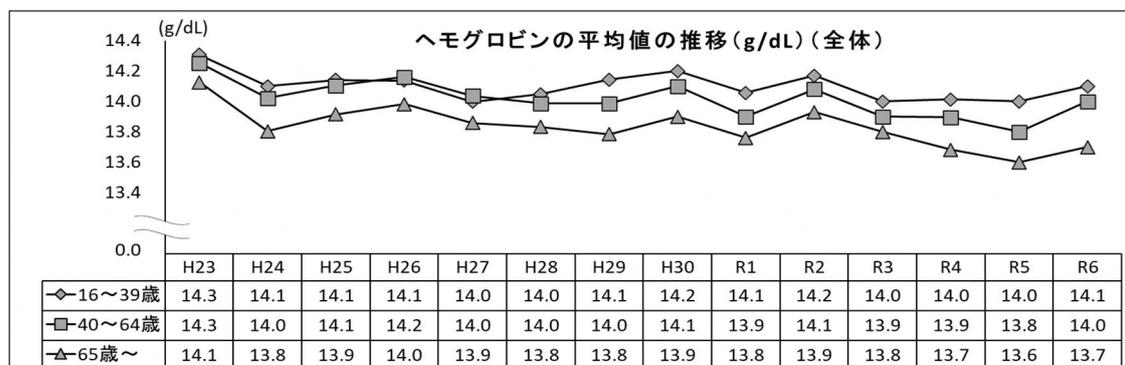
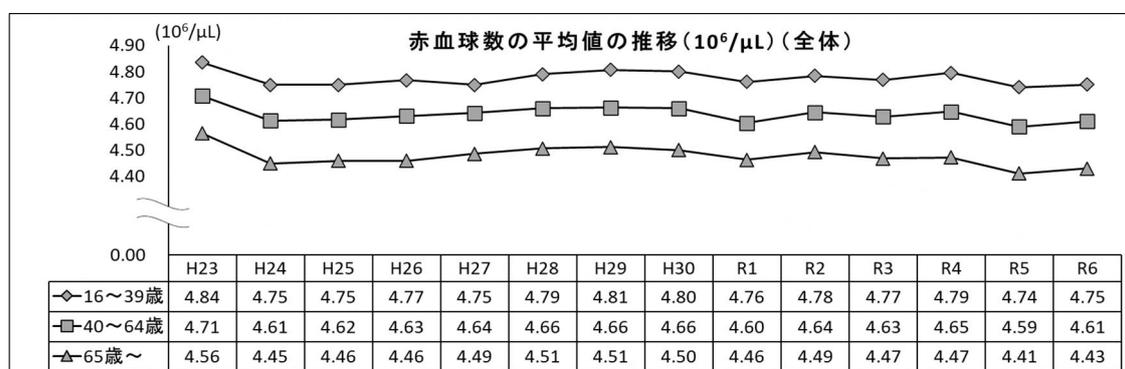
末梢血液検査（赤血球、ヘモグロビン、ヘマトクリット）

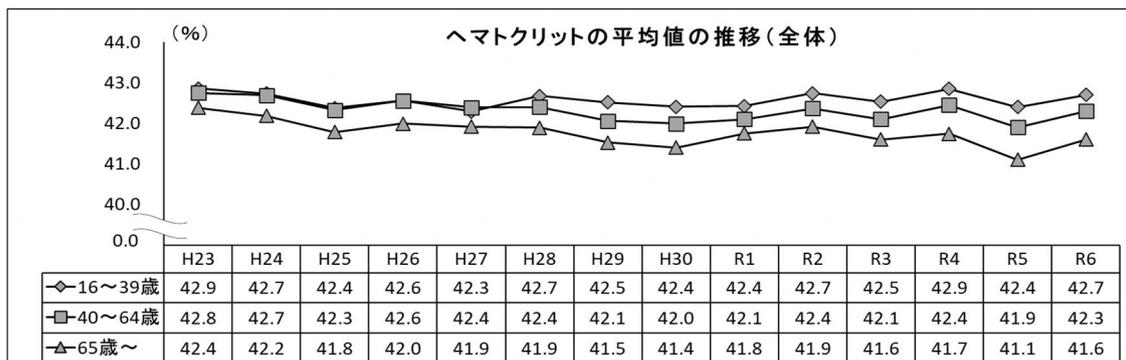
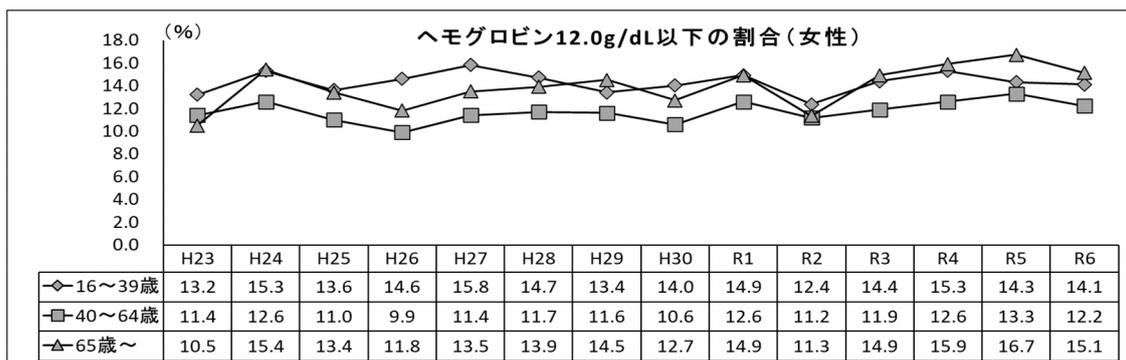
1 結果

赤血球数およびヘモグロビンの平均値は、全ての年齢区分で平成 23 年度から平成 24 年度にかけて減少がみられたが、その後は一定の傾向を示さなかった。

ヘモグロビン 13.0g/dL 以下の男性の割合は、65 歳以上で平成 23 年度から平成 24 年度にかけて増加し、その後は一定の傾向を示さなかったが、令和 3 年度以降、増加傾向がみられた。また、全ての年度において 64 歳以下に比べてその割合が多いことが示された。ヘモグロビン 12.0g/dL 以下の女性の割合は、65 歳以上で平成 23 年度から平成 24 年度にかけて増加し、その後は一定の傾向を示さなかった。また、全ての年齢区分において、大きな差はみられなかった。

ヘマトクリットの平均値は、全ての年齢区分において、大きな変化はみられなかった。





2 グラフの説明

赤血球数、ヘモグロビン、ヘマトクリットの平均値の推移を記載した。

ヘモグロビン男性 13.0 g/dL 以下、女性 12.0 g/dL 以下は WHO の貧血の基準。

3 参考基準値

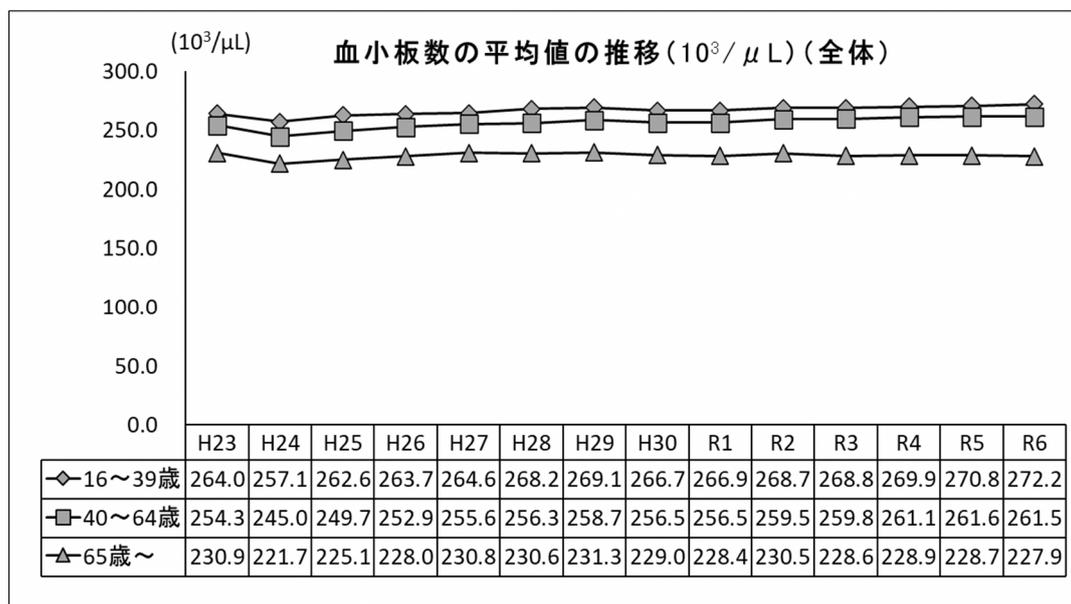
項目名称	単位		下限	上限
赤血球数	10 ⁶ /μL	男	4.35	5.55
		女	3.86	4.92
ヘモグロビン	g/dL	男	13.7	16.8
		女	11.6	14.8
ヘマトクリット	%	男	40.7	50.1
		女	35.1	44.4

出典：日本臨床検査医学会作成「臨床検査のガイドライン JSLM2024」

末梢血液検査（血小板数）

1 結果

血小板数の平均値は、全ての年齢区分において、大きな変化はみられなかった。



2 グラフの説明

血小板数の平均値の推移を記載した。

3 参考基準値（集団健診・個別健診で使用している判定基準）

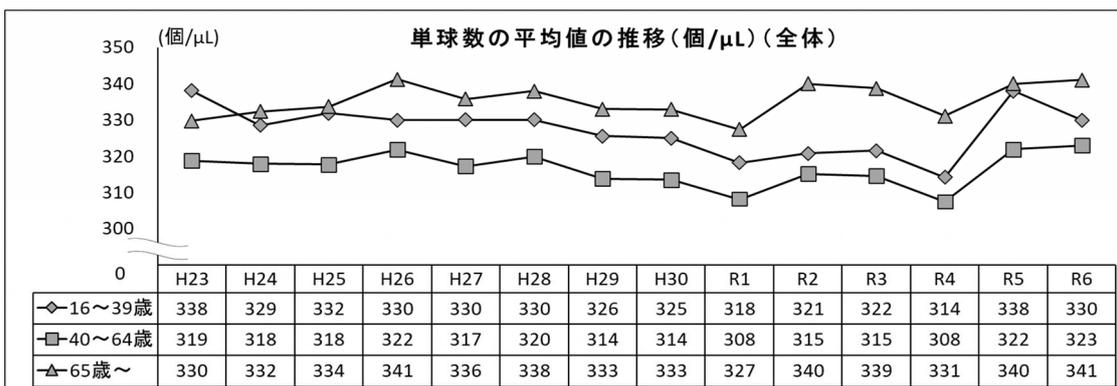
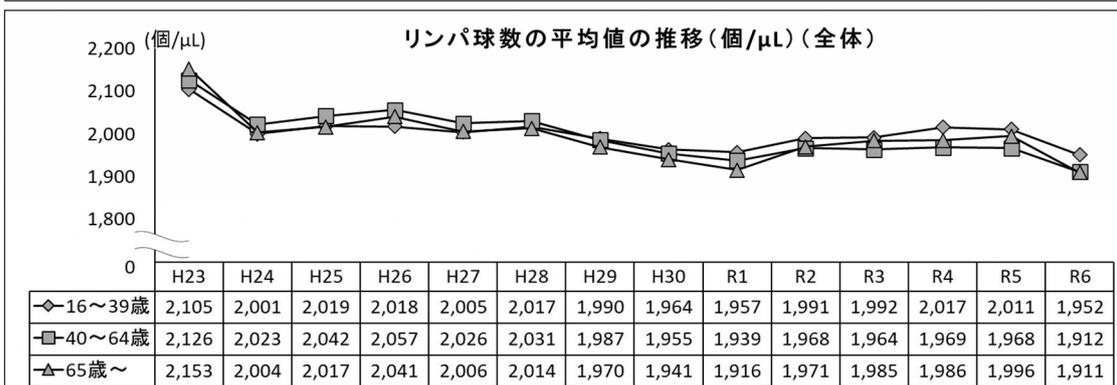
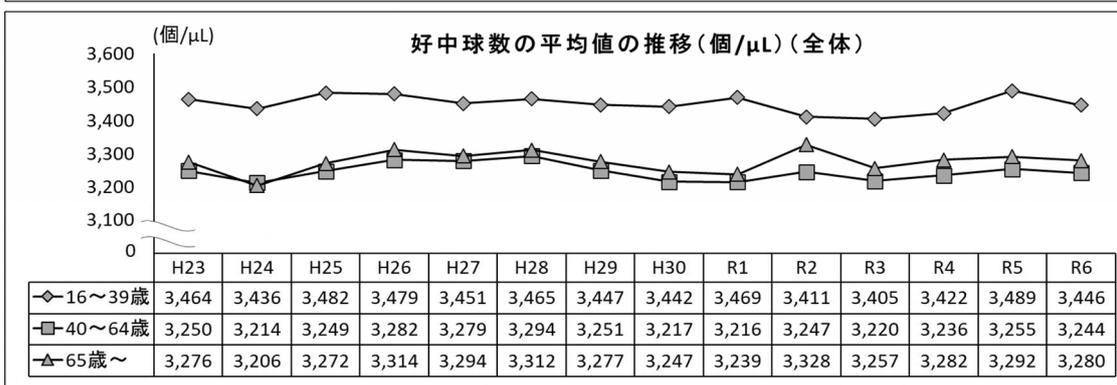
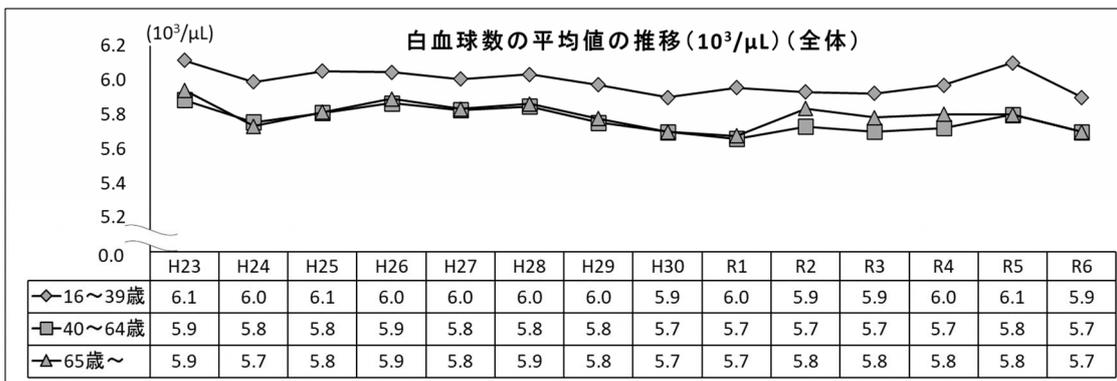
判定区分 項目	基準範囲内	軽度異常		異常		単位
血小板数	130～369	90～129	370～449	89 以下	450 以上	×10 ³ /μL

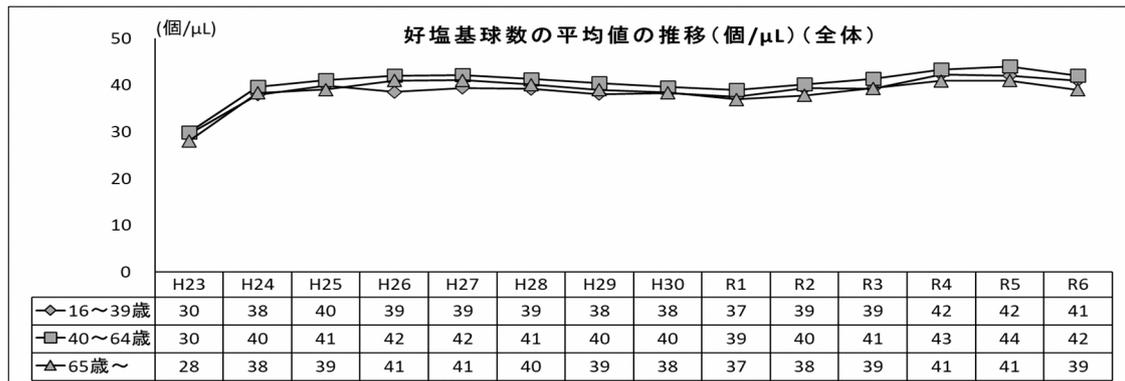
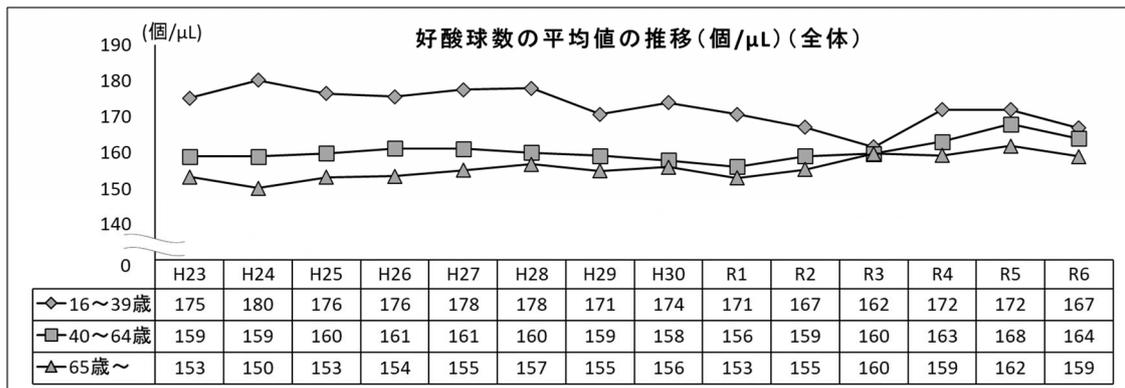
末梢血液検査（白血球数、白血球分画）

1 結果

白血球数の平均値は、全ての年齢区分で、大きな変化はみられなかった。

白血球分画では、好中球数、単球数、好酸球数および好塩基球数の平均値では、全ての年齢区分において、一定の傾向を示さなかった。リンパ球数の平均値では、全ての年齢区分において、令和6年度に減少傾向がみられた。





2 グラフの説明

白血球数、白血球分画の平均値の推移を記載した。

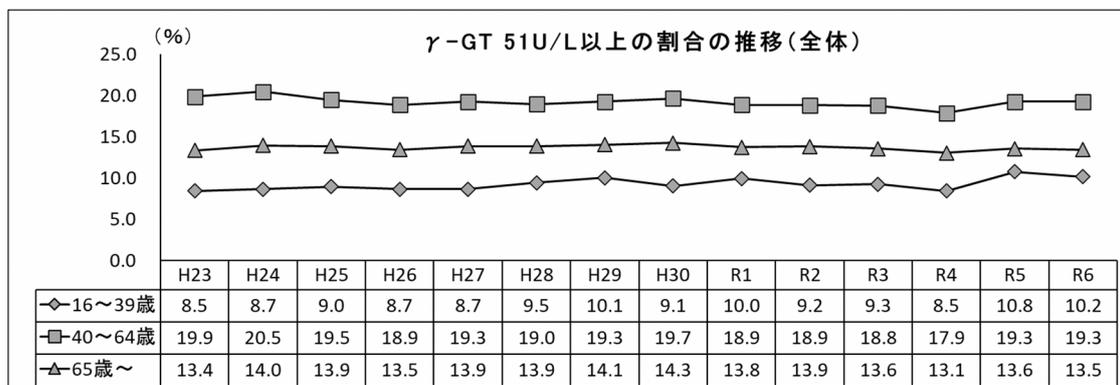
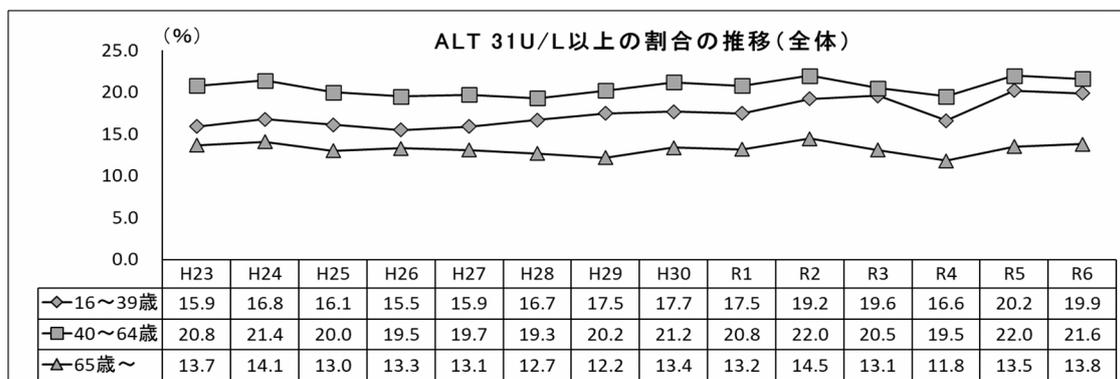
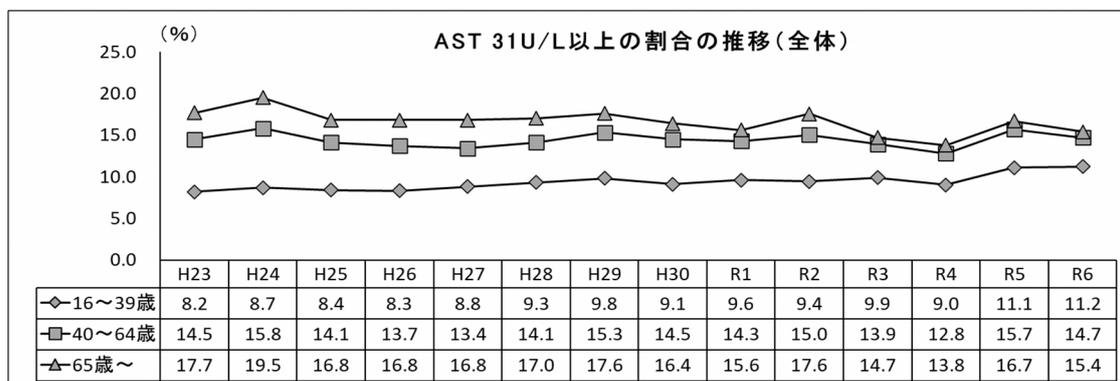
3 参考基準値(集団健診・個別健診で使用している判定基準)

項目	判定区分	基準範囲内	軽度異常		異常	単位
白血球数		4.0～9.5	3.0～3.9	9.6～11.0	2.9以下 ; 11.1以上	×10 ³ /μL
(参考値) 白血球分画	好中球	40.0～75.0				%
	リンパ球	20.0～55.0				
	単球	0～12.0				
	好酸球	0～10.0				
	好塩基球	0～3.0				

肝機能 (AST、ALT、 γ -GT)

1 結果

AST 31 U/L 以上の割合、ALT 31 U/L 以上の割合は、全ての年齢区分において一定の傾向を示さなかった。 γ -GT 51 U/L 以上の割合は、全ての年齢区分において大きな変化はみられなかった。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、肝機能異常を判定した。

3 参考基準値 (集団健診・個別健診で使用している判定基準)

項目	判定区分	基準範囲内	軽度異常	異常	単位
AST (GOT)		30 以下	31～50	51 以上	U/L
ALT (GPT)		30 以下	31～50	51 以上	U/L
γ -GT		50 以下	51～100	101 以上	U/L

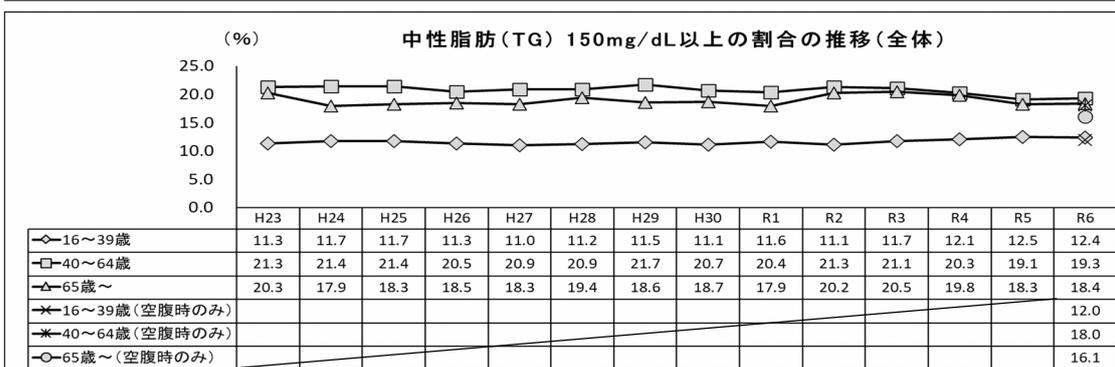
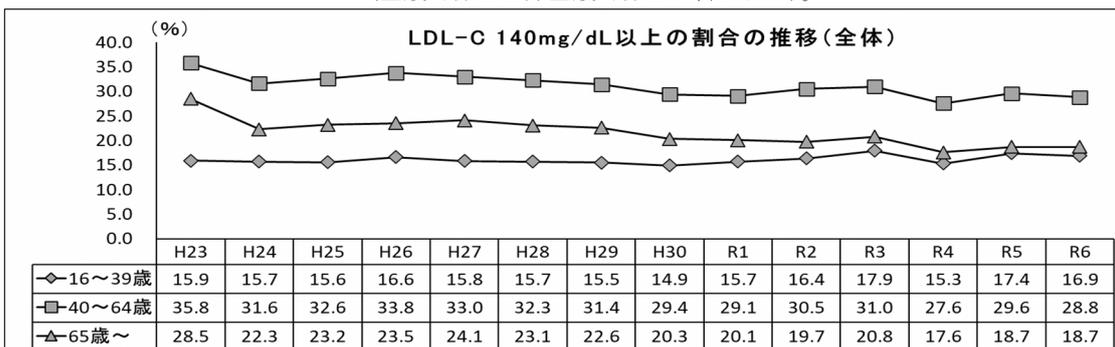
脂質 (LDL コレステロール、中性脂肪、HDL コレステロール)

1 結果

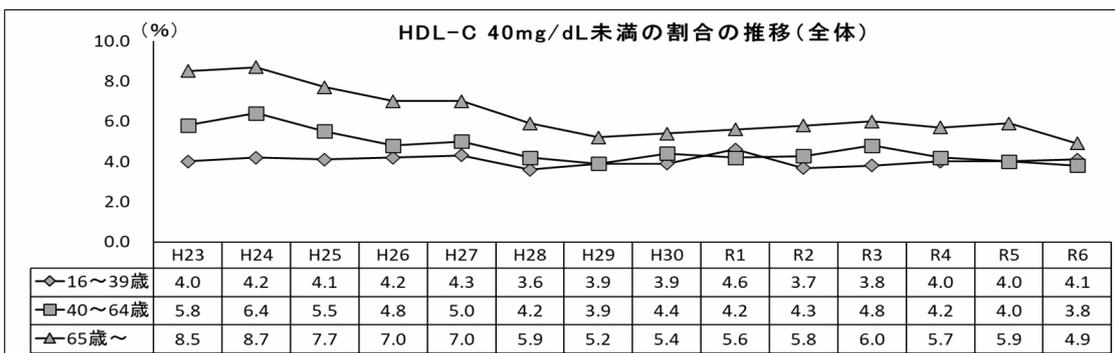
LDL-C 140mg/dL 以上の割合および随時採血*の中性脂肪 150mg/dL 以上の割合は、65 歳以上では平成 23 年度から平成 24 年度にかけてやや減少する傾向がみられたが、その後は大きな変化はみられなかった。空腹時採血の中性脂肪は、全ての年齢区分において随時採血よりわずかに低い傾向がみられた。

HDL-C 40mg/dL 未満の割合は、65 歳以上では平成 23 年度から平成 29 年度にかけて減少傾向がみられたが、その後は大きな変化はみられなかった。

※随時採血とは食事と採血時間との時間関係を問わないで採血したもの(空腹時採血と非空腹時採血が含まれる)。



*R6 より空腹時採血のみの結果も掲載。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、脂質異常症を判定した。

3 参考基準値

脂質異常症診断基準 (空腹時採血)

LDL コレステロール	140 mg/dL 以上	高 LDL コレステロール血症
	120～139 mg/dL	境界域高 LDL コレステロール血症
HDL コレステロール	40 mg/dL 未満	低 HDL コレステロール血症
トリグリセライド(中性脂肪)	150 mg/dL 以上	高トリグリセライド血症

出典：日本動脈硬化学会作成「動脈硬化性疾患予防ガイドライン 2022 年版」

糖（空腹時血糖、HbA1c）

1 結果

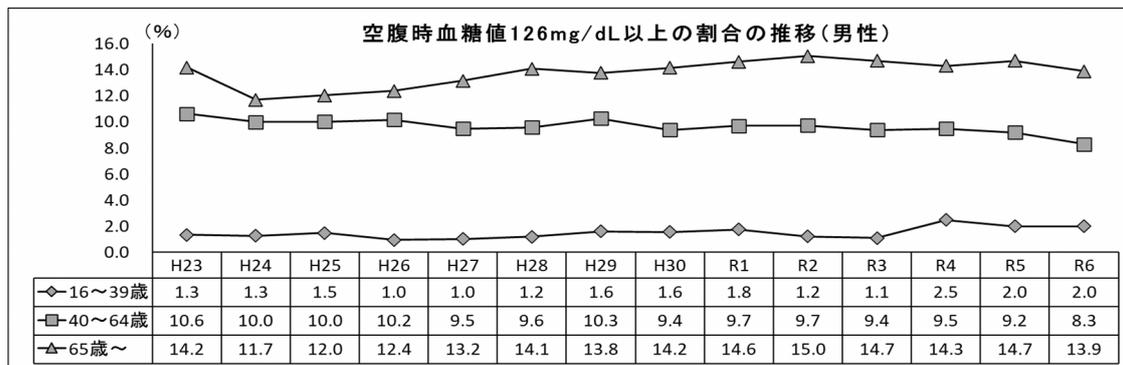
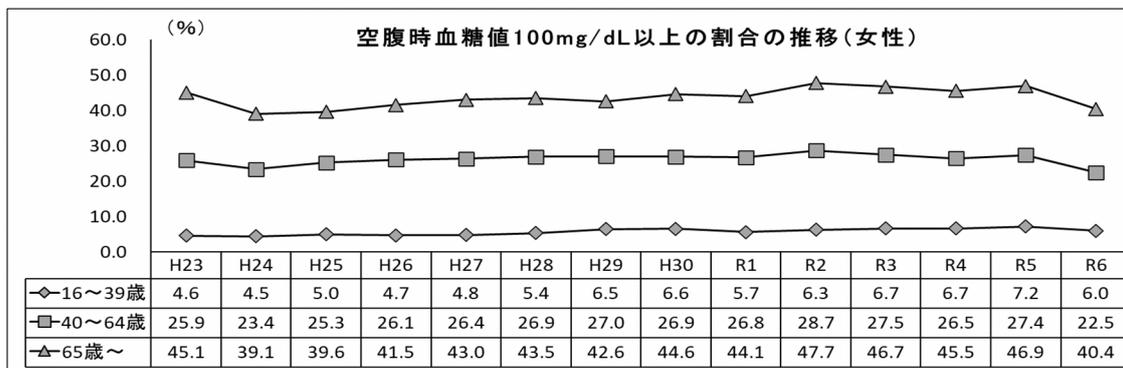
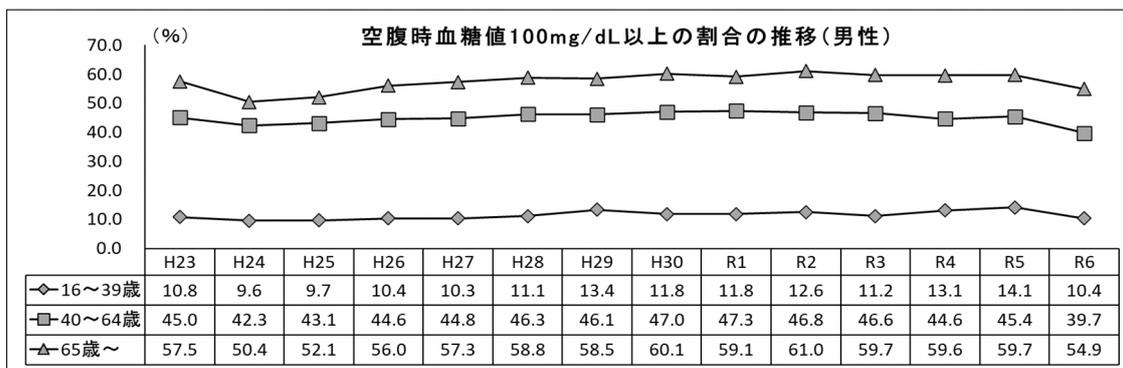
空腹時血糖値 100mg/dL 以上の割合は、65 歳以上の男女ともに、平成 23 年度から平成 24 年度にかけて減少がみられ、その後、令和 2 年度にかけてやや増加する傾向がみられたが、その後はやや減少する傾向がみられた。

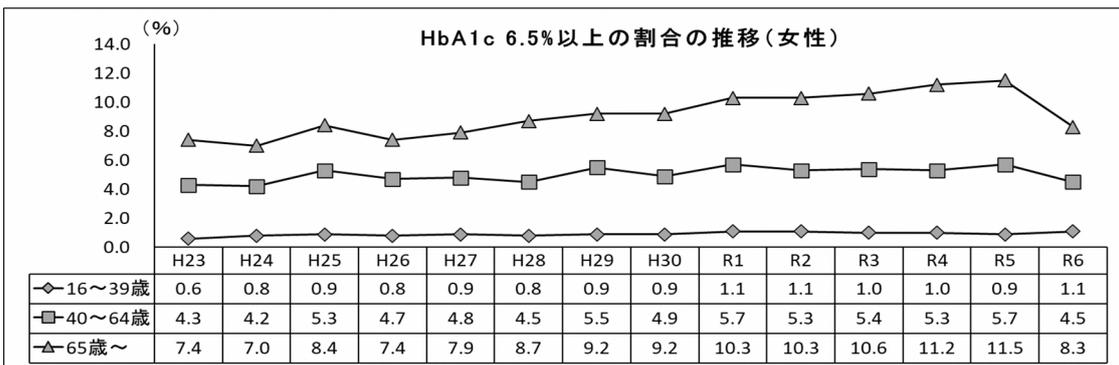
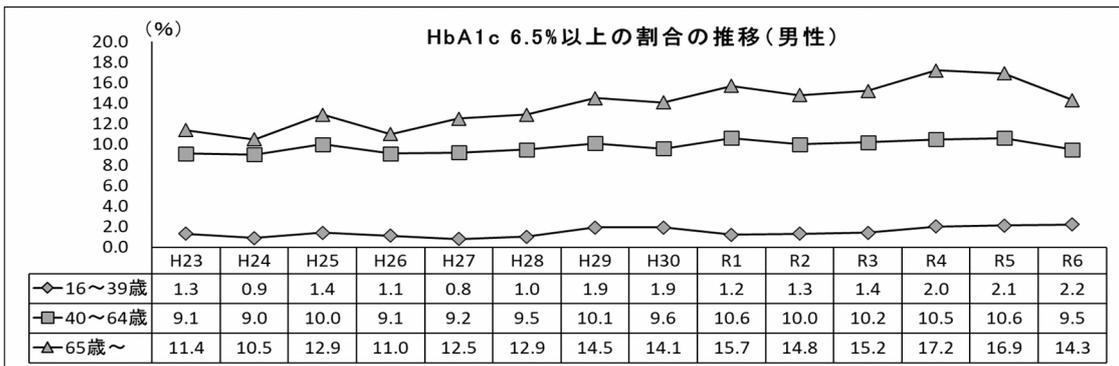
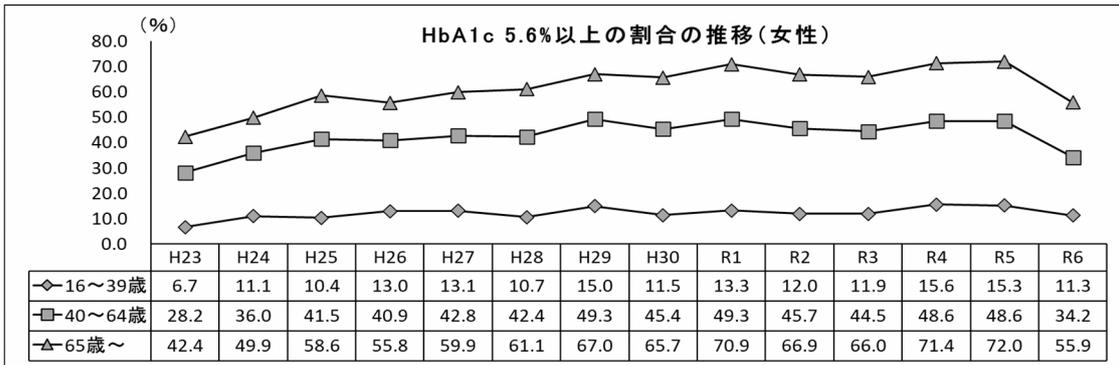
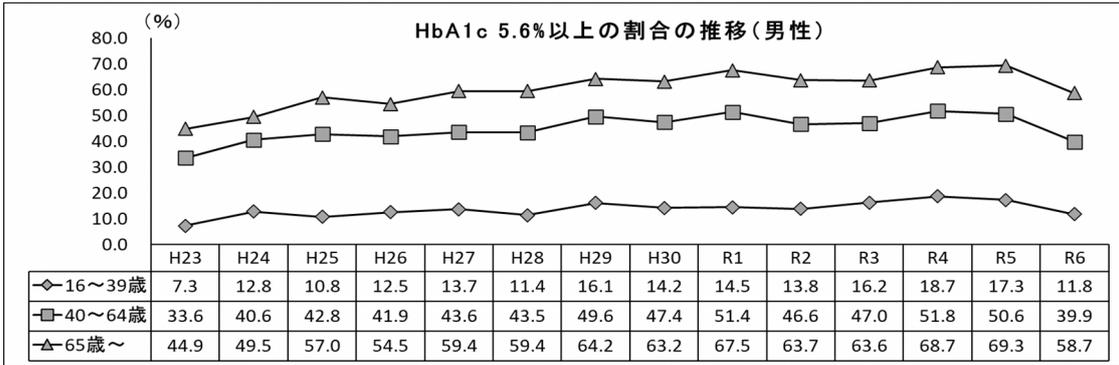
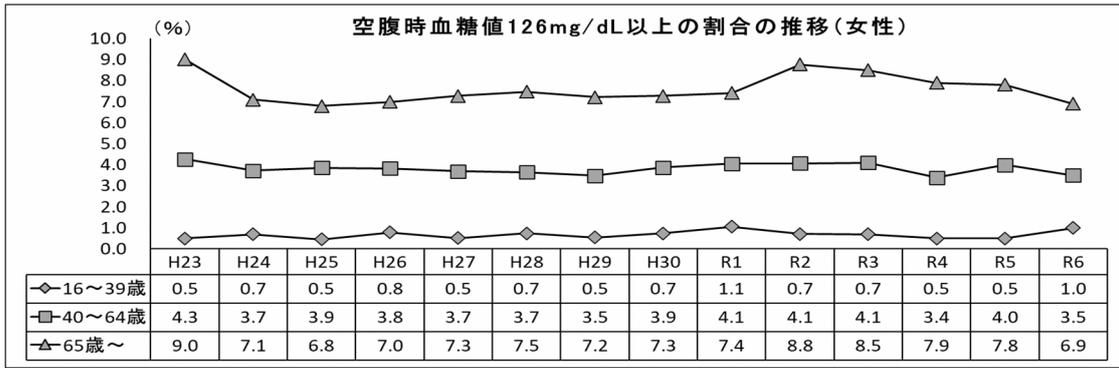
空腹時血糖値 126 mg/dL 以上の割合は、65 歳以上の男性で、平成 23 年度から平成 24 年度にかけて減少傾向がみられ、その後、令和 2 年度にかけてやや増加する傾向がみられたが、その後はやや減少する傾向がみられた。

空腹時血糖値 126 mg/dL 以上の割合は、65 歳以上の女性で、平成 23 年度から平成 25 年度にかけて減少傾向がみられ、その後、令和 2 年度にかけてやや増加する傾向がみられたが、その後はやや減少する傾向がみられた。

HbA1c5.6%以上の割合は、40 歳以上の男女ともに、平成 23 年度から令和 5 年度にかけて増加傾向がみられたが、令和 6 年度はやや減少する傾向がみられた。

糖尿病（HbA1c6.5%以上）の割合は、65 歳以上の男女ともに、平成 23 年度から令和 5 年度まで増加傾向がみられたが、令和 6 年度はやや減少する傾向がみられた。





2 グラフの説明

参考基準値をもとに血糖高値（空腹時血糖値 100mg/dL 以上、HbA1c5.6%以上）、糖尿病（空腹時血糖値 126mg/dL 以上、HbA1c6.5%以上）を判定した。

3 参考基準値

空腹時血糖値および 75gOGTT による判定区分と判定基準

	血糖測定時間			判定区分
	空腹時		負荷後 2 時間	
血糖値 (静脈血漿値)	126 mg/dL 以上	◀または▶	200 mg/dL 以上	糖尿病型
	糖尿病型にも正常型にも属さないもの			境界型
	110 mg/dL 未満	◀および▶	140 mg/dL 未満	正常型

- ①早朝空腹時血糖値 126 mg/dL 以上
- ②75 g OGTT で 2 時間値 200 mg/dL 以上
- ③随時血糖値 200 mg/dL 以上
- ④HbA1c が 6.5%以上

①～④のいずれかが確認された場合は「糖尿病型」と判定する。

- ⑤早朝空腹時血糖値 110 mg/dL 未満
- ⑥75 g OGTT で 2 時間値 140 mg/dL 未満

⑤および⑥の血糖値が確認された場合には「正常型」と判定する。

- 上記の「糖尿病型」「正常型」いずれにも属さない場合は「境界型」と判定する。

出典：日本糖尿病学会作成「糖尿病治療ガイド 2024」より作成

※この資料では、日本糖尿病学会の「糖尿病の分類と診断基準に関する委員会報告（2012）」にある「疫学調査：糖尿病の頻度推定を目的とする場合は、1 回の検査だけによる『糖尿病型』の判定を『糖尿病』と読み替えてもよい。この場合、HbA1c (NGSP) $\geq 6.5\%$ (HbA1c (JDS) $\geq 6.1\%$) であれば『糖尿病』として扱う。」の記載に基づき、「糖尿病型」を「糖尿病」と読み替えることとする。

詳細な健診の項目（医師の判断による追加項目）を実施できる基準

血糖	空腹時血糖値が 100 mg/dL 以上、HbA1c (NGSP 値) 5.6%以上 又は随時血糖値が 100 mg/dL 以上
----	---

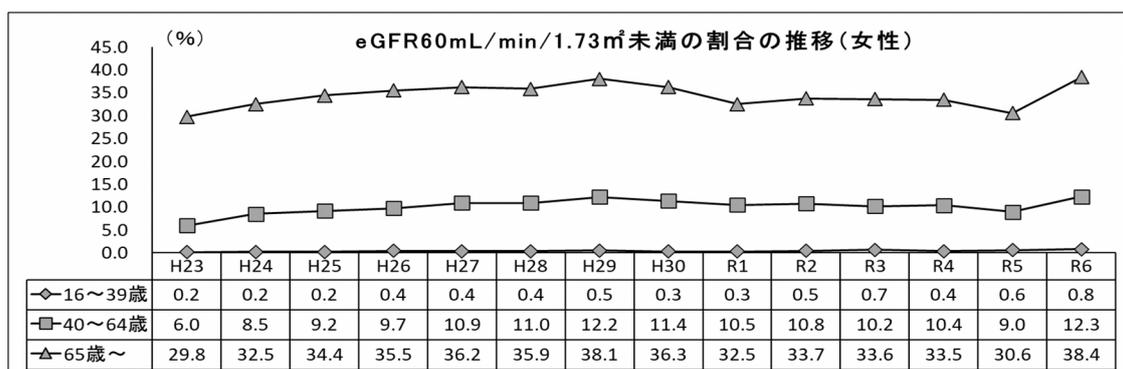
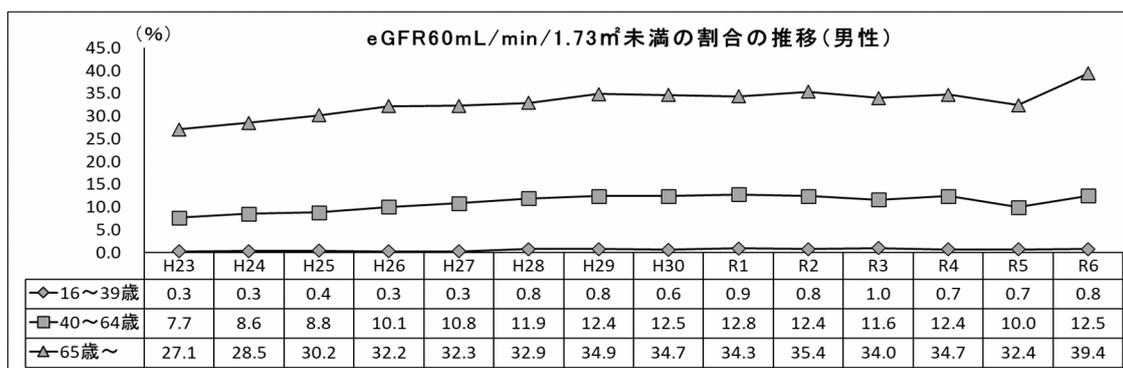
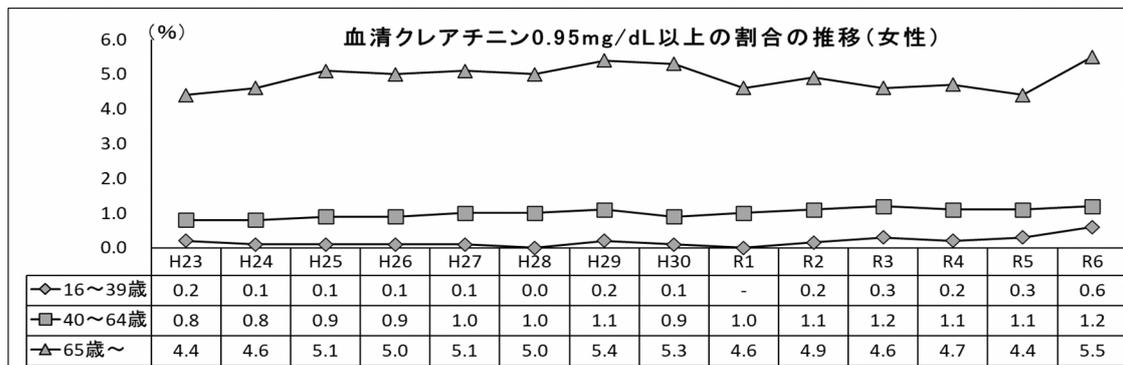
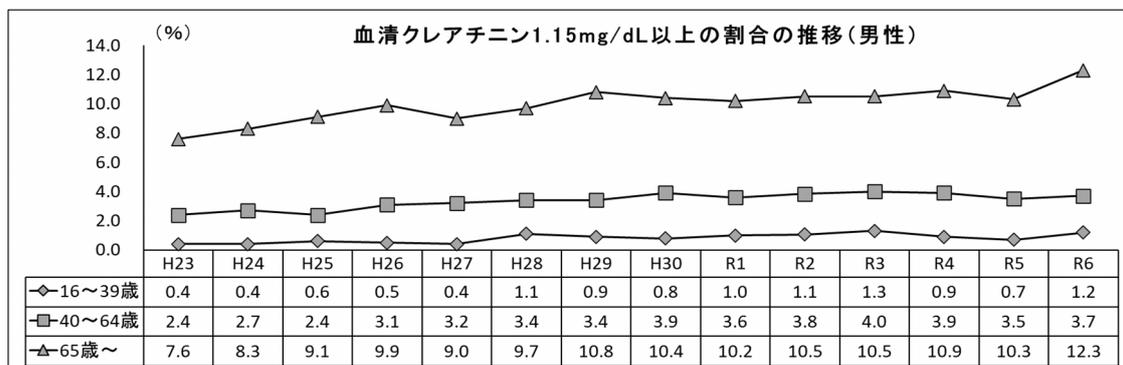
出典：厚生労働省「特定健康診査・特定保健指導の円滑な実施に向けた手引き（第 4.2 版）2025 年」より作成

腎機能（血清クレアチニン、eGFR）

1 結果

血清クレアチニン 1.15mg/dL 以上の男性の割合と 0.95mg/dL 以上の女性の割合は、一定の傾向を示していない。

eGFR60mL/min/1.73m²未満の割合は、65歳以上の男女ともに、平成23年度から令和6年度に緩やかに増加する傾向がみられた。



2 グラフの説明

慢性腎臓病の判定基準である eGFR60 mL/min./1.73m² 未満の割合を示した。

3 参考基準値（集団健診・個別健診で使用している判定基準）

項目	判定区分		基準範囲内	軽度異常	異常	単 位
	男	女				
血清クレアチニン (酵素法)	男		0.45～1.14	1.15～1.34	1.35 以上	mg/dL
	女		0.35～0.94	0.95～1.14	1.15 以上	
eGFR(推算糸球体濾過量)			60.0 以上	45.0～59.9	44.9 以下	mL/min./1.73m ²

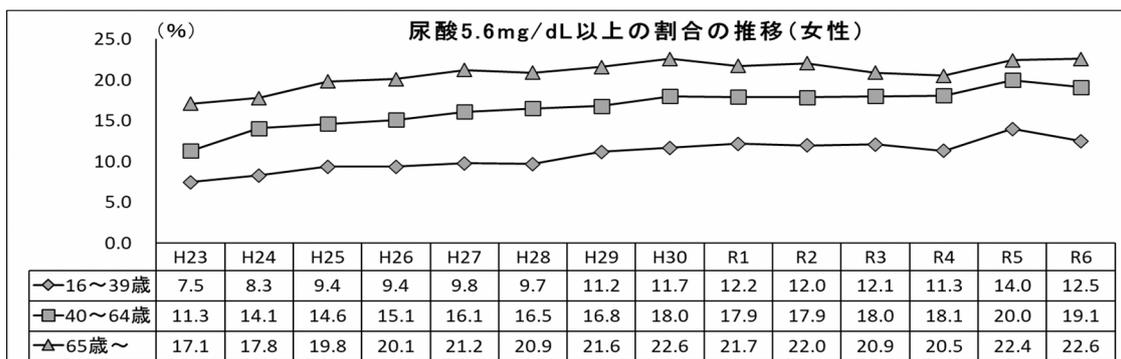
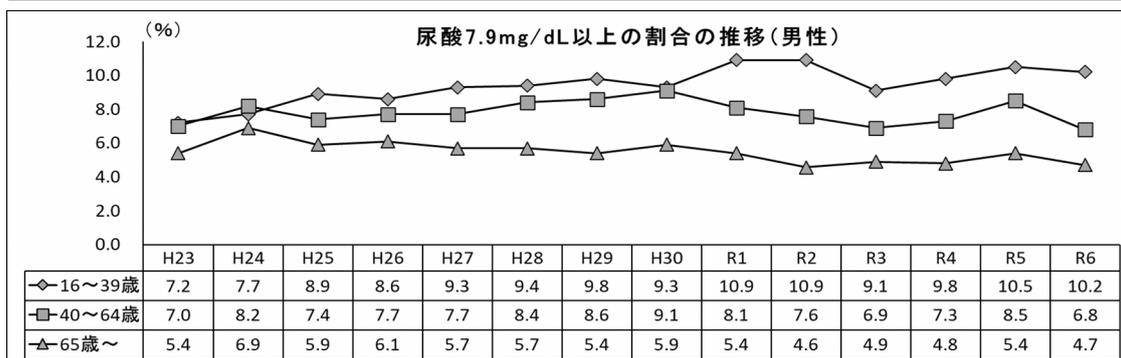
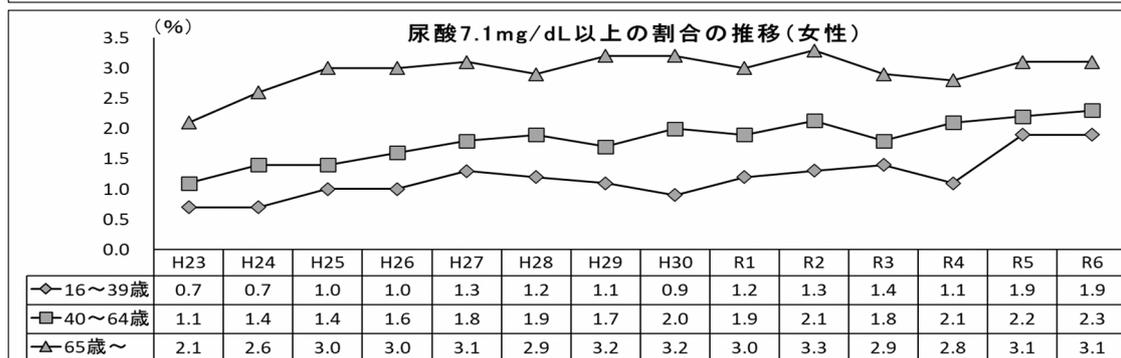
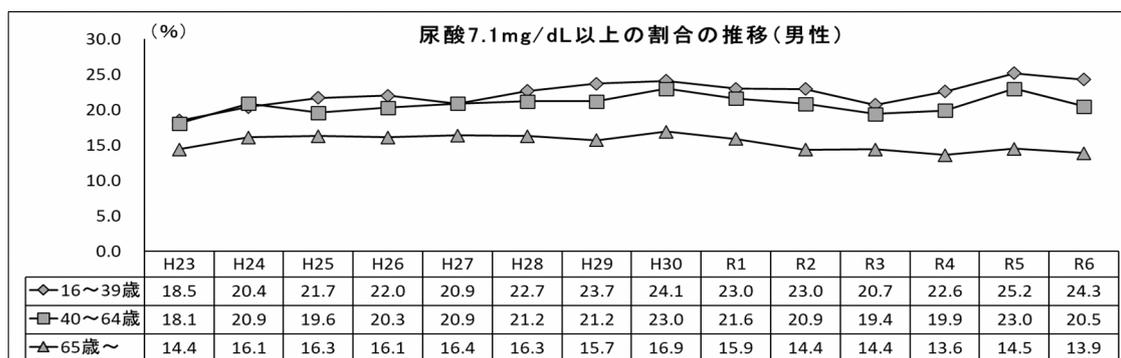
尿酸

1 結果

尿酸値 7.1mg/dL 以上の男性の割合は、16～39 歳において、平成 23 年度から令和 5 年度にかけて緩やかに増加する傾向がみられた。女性の全ての年齢区分において大きな変化はみられなかった。

尿酸値 7.9mg/dL 以上の割合は、16～39 歳の男性では、平成 23 年度から令和 2 年度にかけて増加傾向がみられ、その後は一定の傾向を示さなかった。

尿酸値 5.6mg/dL 以上の女性の割合は、65 歳以上において、平成 23 年度から令和 6 年度にかけて増加傾向がみられた。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、高尿酸血症を判定した。

3 参考基準値

日本痛風・尿酸核酸学会作成「高尿酸血症・痛風の治療ガイドライン」による高尿酸血症の定義	尿酸値 7.1mg/dL 以上
日本臨床検査標準協議会設定共用基準範囲の上限を超える値	尿酸値男性 7.9mg/dL 以上 および女性 5.6mg/dL 以上